

里川という枠組で、どんな川をつくりたいか？

【陣内】

これまで 4 人の専門・立場の違う方々から非常に刺激的なお話をいただきまして、議論したいことがたくさんあります。「里川」というキーワードは、既に使われていたところもありましたが、私たちが新たにそれを応用して、ひとつのメッセージとして考えた造語の一種です。そこからさまざまな問題が引き出され、それらが横に繋がっているということが、今日のお話を伺っていても感じられました。

まず皆さんにもう 1 回ずつお話をさせていただいて、その後で論点を私なりに整理して、議論の方向性を示してディスカッションに入らせていただきたいと思います。

【島谷】

皆さんのお話を聞いていて、共通する部分が多いと感じました。それぞれ表現は違うのですが、「その場所に相応しいものを見つけていく」ということは共通していると思います。それから川というのが誰のものでもない空間であり、そこから入会という概念、「みんなの持ち物」という概念が生まれてきた。川の工事でも入会の土地の木を切ってきて、維持管理をやっていたと思います。今は所有権が個人になってしまいましたが、川はみんなのものです。市民参加も役所だけを相手にしていればいいからやりやすく、だから川づくりが盛んになってきていると思います。

新しい言葉として里川を考えていく際に、「みんなで川をつくっていく」もしくは「みんなで川を管理していく」という時代になれるのか、なれないのか。特に東京のような大都市の河川像をどのように描いていくか。私は先ほどご紹介しました神奈川県和泉川のような川が都市の中に必要で、都市の中にこそ自然がもう少しあるような里川があったらいいと思います。

【小野】

里川の成立には管理や共同作業が必要であることは、共通して認識されていると思います。しかし私がそうした現場にいるので感じるのですが、管理することは非常にしんどいことです。私は、ボランティアだけに頼って管理するのはしんどいと思います。

私の発表の中にあつた「艶っぽい」という表現が分かりにくかったと思いますので、もうひとつの例をご紹介します。瀬戸内海に白石島という小さな島がありまして、そこは元禄時代の干拓地があり、朝鮮通信使の船が立ち寄ったこともあるようなところでした。その干拓地と港の間に緩衝池があつたのですが、そこが 40 年間も底の泥をさらわなかったので、クライシスのような状況になっています。それが潰れてしまうと、港が汚れてしまうと思います。かつては、その池を維持するために、お盆になると村の若い男と女が出てきて、底の泥をさらったのです。だいたい若い男がそういう場ではエエ格好をするので、自分に力があることを見せようとして一生懸命やり、カワイイ女性がいると持っていく泥を少なくするなどをします。一方、女性は男性に対して気を遣います。このように底をさらう作業が、男と女のやり取りになっています。労役をするのに歌を唄ったでしょう。その底さらいが終わると、その後に盆踊りがあり、ここもエエ格好する場所でもあります。この「艶っぽい」はダイレクトなものではありませんが、

水を管理をする際には辛い行動があるのですが、それが艶やかな記憶としても残っています。80代のおじいさんに聞きましたら、昔はそういう艶っぽい話がたくさんあったと言われました。彼らにとって一定の水の管理、ここでは里池になるでしょうが、そこには艶っぽさがあったということの一例です。私はこうした事例を現代にもつくり出していくことで、維持管理に精が出るのではないかと考えています。

【鬼頭】

桑子敏雄という哲学者が「空間の利益」という言葉を使っていますが、自然そのものの論理や歴史をどのように捉えるかは、非常に重要なことだと思います。現在、全般的に里山や里川などの二次的な自然に関心が高まってきて、人間の管理や関与が肯定的に語られるようになりました。そうした状況で、人間の思いでさまざまなものを管理をすると、近年では技術が発達しているので、管理できてしまう部分があります。しかし自然と人間の関係においては、自然が人間に擦り寄る場合があったり、逆に人間が自然の論理に適合していくことを繰り返し、ともに進化しているとも言えます。その際に、自然そのものの、人間から離れた論理をきちんと認識した方がいいと思っています。ただそれが自然科学的な科学知になるか否かが非常に重要で、特に社会学などの文系の方と自然科学などの理系の方の間では、同じことを言っても差があったりします。先ほどの生活知は、多くの学者がその重要性を認めています。社会学者・民俗学者・人類学者が訴える重要性と、工学・生態学の学者の訴えとニュアンスがかなり違うと感じています。ですから島谷さんは共通するところがあると仰っていましたが、社会学者として違和感をもつ部分だと思います。その辺りの摺り合わせをする必要があると思います。それから「匂い」は身体知だと思います。里川と自然の関わりを考える際、身体知のレベルをどうするかが重要だと思います。

【鳥越】

島谷さんの考え方は、土木工学の中でも多数派の考え方ではないと思うのですが、大変素晴らしいと思います。ある種の最先端だと思います。私も違和感を感じていたのですが、先ほどは品良くまとめたのですが、鬼頭さんに見事に見破られていました。ここは確かに議論すべき所かと思っています。

私が言いたいことは、私たちが里川を考える時に、比較的川を対象にしているのですが、現実の場で問題になるのが農業用水です。江戸時代からの農業用水が現在も使われているのですが、いわゆる乱開発に近い形で住宅開発が行われて、新しく住み移ってきた人たちには下水道に見える。平気で生活廃水を流せたり、酷い人は自転車を投げ込んだりしているような、幅2～3mぐらいの農業用水があります。これが川に結びつくのですが、ここがやられてしまっている。ここは生産の水です。これを水利組合が握っているのですが、水質・水の保全に対してあまり関心がありません。有機物の混入は、大量で無ければあまり深刻なことではない。一方で地元の人にはこれに関心があって、場所によっては水利組合と話をし、具体的な活動を初めている。これが全国に非常に多いのですが、手付かずに近い。まちづくりにおいて何かをしていかなくてはと思っています。

もうひとつは溝とか小溝とか言われている、幅数10cm～1m程度の流れです。これが暗渠にされ続けていて、蓋をされると水が汚れていく。これは昔から指摘されていることですが、この小溝について

考えてくれる人がいないのです。これは毛細血管のようなもので、これがしっかりしてくれないと川の水は困るわけです。これは生活用水であって、決して遊び水・暇つぶしの水ではありません。この生活用水として、従来は集落・部落で管理されていたものが、現在では杜撰になっている。行政も単に「水を流すところ」という発想でやっているのだから、これを毛細血管だと認識して政策を出さないといけな
いと思っています。これについてもご意見などをいただくと大変参考になります。

【陣内】

ありがとうございます。私は法政大学でエコ地域デザイン研究所というのをやっていて、日野市をフィールドワークに選んでいます。あそこは用水がもの凄くたくさんあったのですが、それが段々失われていき、水田も消えていくという中で、どうしたらいいかという大きな問題を扱っています。これは日本の水環境を見ていくと、すぐに出てくる問題です。

環境の最先端でやっていらっしゃる非常に刺激的な問題提起で、共通する部分と、スタンス・価値観などが違うという両面が出てきて、議論が出来ると思っています。

まず「どういう川や水辺がいいのか」というイメージも、時代とともに変わってきて、立場によって幅もあります。多自然川づくりを推進してこられた島谷さんのお話では、19世紀まで人間と自然が共存して管理してきた場所は非常に美しかったのですが、それが力づくの治水によって失われてしまった。市民は美しい環境観を持ちながら、ナチュラルに見る視点があったけれども、技術者はそうではなかった。それが多自然川づくりに携わることで、技術者の意識も変わってきた。自然の力で川はつくられ、そこに美しさが加わってくる。建築の世界では、都市づくりにおいて“計画された都市”と“生きられた都市”という言い方をします。全部計画して押し付けられた町はつまらないので、既にあるものに対して目を向けていく景観づくりをしてきたのですが、河川工学の分野でそのようにやられてきたのだと感銘深く聞いていました。それから“格好いい”という言葉も、若い技術者の仕事に対する評価をされていて、まさに格好いい場所に行ってみたいわけですから、そういう空間ができてることが待ち望まれます。

一方、吉本ばななの言葉から引いて、「川に体臭がある、真っ黒でぞっとするようなところの良さ、周辺性を大切すべきではないか」という別の価値観を鳥越さんがお話されました。特に里川を考える時に、人と密接に結びついている川の有り様として、大きな川や小さな川でさまざまなイメージがあると思います。それと関係するのですが、川のライフヒストリー、歴史とか地域・文化の重要性は皆さん仰っていました。

それから島谷さんが仰ったんですが、土地の条件に加えて歴史が生み出す川の個性を考えると、普遍性より地域性を大切にすべきとのご指摘がありました。ここで歴史をどう見るかというところで二つのアプローチが出たと思われま
す。ひとつは環境史という魅力的な分野から小野さんが発表されたわけですが、記憶という言葉も使われて、史料的に確からしいもの、復元的に考えられるもの、必ずしもそうでないものもある中で、新たな伝説をどのように作れるかという面白い指摘もありました。川の記憶、それに基づく“その場所らしいもの”をどう創っていくかも、非常に重要だと思います。そしてもうひとつ鳥越さんから、「三面張りの川にも歴史があって、それを頭から否定するべきものでもない」という衝撃的なお話もありました。

最近私たちが東京で議論をしていると日本橋の高速道路の話になりますが、会場からも「清溪川の復活は、里川化か。日本橋の高速道路を取り払えば、里川化できるのか」という質問が届いていますが、実は私は迷ってしまいます。若い 30 代の建築や都市計画をやっている人たちと話をしていると、「あの橋は取って欲しくない」という人が多いのです。つまりあの風景は、若い人達にとっては生まれたときからあった原風景だということです。「都市には歴史の層が重なっているのが望ましい」と言ってきたわけですが、あれも都市が積み上げた歴史のひとコマである。そして「既存のあるものの意味を変える」「見方を変える」「活用する」といった議論をした上で、高速道路を取るという考えが出てくるかもしれないと言うのです。凄く正論のところがあると思います。取る側の発想からすると、今まであれだけ汚くしておいて、何もしないで、厄介者をただ外すという議論になりかねないので、ここは大切な部分を含んでいると感じます。

3 番目ですが、元々人間の営みというものが川を中心にしてあったので、川は人々によって管理され、大切にされ、使いこなされた必然性をもった美しさがありました。“生業”“仕事”“遊び仕事”という面白いお話を鬼頭さんにしていただきました。生業が産業化して場所から離れていき、遊びもバーチャルになって場所から離れていく。そういう近代化を辿った結果、共同性というものがなくなってしまった。水を管理する里川、川を管理することから里川が生まれてくる。みんなで共有し、治水も頑張り、利用もやる。さらに庭園の中の水田がたくさんあって、そこでみんなが作業をやるからこそ賑わいがあって、お祭り気分もあった。総合性があったのだと思います。それが削ぎ落とされていく中で、共同性を支える関係がなくなってしまった。この共同性をどうつくっていくか。

また小野さんは、みんなが働いて共同性を発揮した場所が美しいのに、現在では見るためだけの庭園になり、ライトアップまでされたテーマパークになってしまっている。そういう形で水の空間が解釈され、現代的な価値を与えられていく。あるいは管理を行政に任せてしまったことで消費者になってしまい、無責任で、川を見なくなってしまったというお話もありました。

さらに「現代の共同性を、どのように作り直すか」ということを、皆さん仰っていましたが、それぞれ立場が違いました。自由主義と共和主義の話もそうでした。今まで個人の自立、個人の生活の豊かさばかりを追及してきて、そうではないフェイズに来れるようになって、共同性・ボランティアという話が出てきた。あるいは身体知が、共同作業の中から生まれてくるのではないかという話。それに対して、小野さんは特にボランティアに対して冷ややかで、そうじゃないかつての非常に知恵のあった社会のあり方、どぶ川をさらう作業をみんな艶っぽく、盆踊りや祝祭と絡めてやる。そういう社会の中に持っている仕掛けが共同性を作り出している。それを現代だったらどうしたらいいのかという問題を提起しているのだと思います。

もうひとつ面白いと思ったのが鳥越さんの話です。共同体の所有・支配から外れた権力の手の届かないところ、ある種自由な空間を網野善彦さんは「アジュール」と呼びました。川のように水の近くはとりわけ不安定な場所だったので、そういう自由度が出来たという面がありますが、その中で固有の文化が生まれてきました。そういう周縁的な怪しげなところに注目して、現代で何かできないかという視点を指摘されたのではないかと思います。

そこで、「どのような里川がいいのかというイメージ」に関してお話いただけますでしょうか。

【島谷】

“多自然”という言葉には、私も違和感がありますが、行政用語だから仕方がないと思います。ヨーロッパでは“近自然”と言っていますが、自然に近づこうという思想よりは、多様の多自然がいいかなと思います。既にお亡くなりになられているのですが関正和さんという技術者がいらっしゃって、彼が亡くなる前に、病院でこのような話を伺いました。

「川に神様がいるんだよ。公務員からこういうことを言っちゃいけないんだけど、石には神様がいる。魚にもそれぞれ神様がいる。そういう多様な神様に感謝するのが多自然型川づくりなんだよ。全国には色々な川があるから、全国で多様な川が出来るような多自然になればいいのではないかな。生物多様性の“多”もあるし、自然環境の“多”もあるから、多自然なんだよ。」

川には水が流れているのですが、今日の話の中で水の話があまり出てきませんでした。結局、どう水をコントロールするかということに、日本人は凄いい苦勞をしてきてました。これも古代から続いていまして、普段の水を確保する方法と同時に、洪水に遭わない方法という二面性を考えながら、水と付き合ってきた。都市の川も水をコントロールした結果として、今の姿があります。玉川上水だって、多摩川から水を引いて、延々と流れている水をコントロールしているのです。水が無い限り川ではないので、現在のドブみたいな川になっている状況を立ち返らないと、いい川は出来ないと思います。水が少ないならば、どうやって水を増やしたらいいのか。汚いならば、どこから来ているから汚いんだということを考える。都市は降った雨がすぐ出て行くようになっているから、少しでも水は貯める方がいい。さらに水循環のことも考えなくてはならない。それから生き物がいるということも大切で、先ほど鳥越さんは三面張りの川でもいいじゃないかといったけど、やっぱり生き物がいない川はやりすぎだと思います。元々川には生き物がいて、自然の住処としていたところを、生き物が住めなくしているのは人間の勝手である。全て自然の通りとは行かないまでも、最低限、生き物が住めるようにということ考えた里川でないと意味が無い。生き物のいない川は寂しいと思います。自然と人間との関わりの中で、川というものがある。水の循環と生き物というものを考えた里川づくりというものを考えなくてはと思います。

【鳥越】

私は三面張りの川がいいと言ったのではなくて、三面張りになってしまった川の存在を否定したところから始めてはいけないと言ったのです。何でこうなってきたのかを考えるとところから始めようということであって、三面張り肯定論者ではありません。

「どういう川が良いのか」について、私の考え方はあちこちから批判ばかりを受けています。これは広い支持を受けるものではないんですが、言い続けています。どのような川がいいかといいますと、その住民が決めるべきだと思っています。その住民が決めれば、それがその川なんだという立場です。私は社会学者ですから、住民というのは人を裏切り、騙し、様々な仕事の関係で関与できなかったり、さまざまな損得で動いていることは、良く知っています。にも関わらず、それは住民に考えることである。もしそれが出来の悪い川でも、それは住民自身が責任を取ればいいというのが、私の考えるところなんです。皆様の頭の中にたちどころに反論が浮かんでいると思いますが、私はそのように言い続けています。行政の人にも、そのようなことを言い続けています。

それと絡めまして、共同性がなくなったという話です。政府は昭和46年、かなり強制的にコミュニティ復活の政策を出し、それ以降一貫しております。阪神淡路大震災によって政府の方針が、ややボランティアに移りましたが、地方自治体は共同性、コミュニティ強化論に入っています。これは今のところ揺るぎありません。私はこの地方自治体の動きを評価しております。地方自治体はコミュニティの復活のために、具体的な政策を出しています。今までは市町村が行っていましたが、都道府県自身もかなり大きい予算を取って、コミュニティ復活をやっています。しかし行政は、このコミュニティの姿を十分に見えていません。ただ大きな流れとしては、このようになっています。

私は国土交通省の課長補佐級の人たちの研修会で、川だけではなく社会科学的な話をしました。その研修会に参加された人たちが終了後に出されたコメントで、私の「川のことについて住民参加すべきである」という話に対して、強力な批判がありました。「住民の意見は騒音である。なぜなら素人だから。土木工学を中心とした専門家がいるから、できるんだ」と言うのです。こうした経験がありますので、島谷さんの今日言われたことは大変驚いたし、技術者の最先端は、こういうところをきちんと見てなさっていることが分かり敬意を表したいと思います。しかし国土交通省はそのような歴史を持っていたことは、間違いの無い事実です。ただ国土交通省から出てこられて、現在は地方自治体に関わっている技術者には、まだ否定的な人たちが現実には多くおられて、島谷さんの言われたようなところは素晴らしい例だと思うのですが、それが広まっていくことを心から期待しております。私の経験では、滋賀県の琵琶湖で私たちの県技官とぶつかったことがあります。「砂の上を流すと水がきれいになるから、三面コンクリートにすべきではない」と私が言ったのに対して、「三面コンクリート化しても、水は汚れないという論文もある」と反論されました。このように議論し続けているのが現実であります。

こうした中、地方自治体の方針として参画と協働が挙げられるようになり始めました。つまり計画に住民を入れていく論理です。この方式は国自身も取り始めているように見受けられますが、地方自治体もやっています。もっと具体的には、町役場ぐらいから起こりました。町役場が恐らく、市役所とか村役場よりちょうどいい人口で話しやすいのでしょうか。企画の中に住民を入れていくことは、行政としては大変勇気の要ることです。しかし責任を持たされると、素晴らしいアイデアを住民の方がいっぱい出されてきました。やっぱり住民の中には凄い方がいらっしゃるんですよ。そういった人が3~4人固まると、行政の人たちも認めざるを得なくなってきました。

この時に行政の人たちの役割が非常に重要になってきます。住民アイデアのいいところを掬い上げつつ、ダメなところを上手く調整して行くことが必要になります。地方自治体の職員には、凄く尊敬できる人がいて、この参画と共同が上手くいけば、各地域で自分たちのアイデアを出していく道が出来ると思います。

【小野】

「どういふ里川にすればいいか」については、正直申し上げると分かりません。本日は記憶や歴史という話をしましたが、「どういふ記憶を採用すればいいのか」という問題になると、非常に難しくなります。生の人間が辿れるのは、だいたい3世代前ぐらいの歴史になると思いますが、それでは3世代前の環境が本当にいいのかと言うと、そうとは言い切れません。最近では昭和30年代がブームになっていますが、昭和30年代の日本は汚かったですよね。それがブームになっているのです。私は文献的

な資料で歴史を遡っているのですが、そのことである程度事実は明らかに出来ます。例えば鬼頭さんが仰った身体知や感性についても、ある程度分かると思います。御後園に水田や茶畑などの畑がたくさんあったということは、そこは非常に臭く、芳しい匂いは絶対にしない場所であったということが分かります。しかしそれもひとつの匂いです。それからもうひとつ難しいのが、こういった感性の話をしていると、“好み”という問題が出てきます。論理的でないような世界が、必ずついてまわります。

先程、鳥越さんが国学の歌の話のをされかけましたが、記憶を共有する際に、私は歌は非常に重要であったと思います。川ではなく山の話になりますが、京都を巡る山について、源融(みなもとのとおる)という嵯峨天皇の皇子が歌を詠んでいます。実は、融が眺めながら詠んだとされている風景は、実際に京都に立ってみると見えていなかったことが分かるのですが、それはともかく山々について歌っていて、それを世阿弥が能にしています。その歌は、それぞれの山々が持っている記憶の沈殿を呼び起こすようなものになっています。これは中世の日本人が持っていた、京都に住んでいた人々が持っていた一つの感覚だと思いますが、自分が宇宙の中心にいて、全体の山を見ているのです。こうした感覚を共有してしましたら、山を見えなくするような高い建物は建てないはずで、共有するものがなくなってしまうと、壊してしまうことが平気になってしまうのです。恐らく昭和30年のテレビの普及とともにこういった世界が崩れていったと思っています。それに代わるものを、現代の我々がつくり出すことができるのでしょうか。

結局、結論は鳥越さんと同じです。その土地の住民が決めればいい。決めるということは、今までの歴史的な脈から多少ずれるかもしれないが、自発的で出処不明の歴史を作ること。後の歴史家が困ると思いますが、そういうものをつくる。それでどのような美しいものをつくるかは、感性の問題になります。いい感性、いいアンテナを磨いて、もちろん歴史的なことを調べてもいいでしょうし、皆さんで議論されてもいい。それしかないのではないのでしょうか。

【陣内】

祝祭の社会学をやっている松平誠先生のフィールド調査に基づくお祭り論によると、伝統的だと思われていたお祭りが実は近代にできた、あるいは近代に今の姿になったものが多いそうです。高円寺の阿波踊りは大変なもので、いまや阿波からやってくるということがあります。

【鬼頭】

国土交通省を外からみている立場でお話を致します。かつてはかなり酷かったのですが、今では島谷さんのような方がおられて、これがそのままいけば凄いとありますが、現実にはそうはなっていないと思います。また淀川水系流域委員会に、現在大変な逆風が吹いているように、こちらも現状では苦勞されているようです。ただこれも長い目で見てあげて、島谷さんや淀川委員会などを、外からどのような形で支援していくかを考えなくてはと思います。

それから「住民が決めればいい」とのお話が出ましたが、私も普段はそう言っているのですが、ただそうやってしまつては危ない部分もあると思います。住民の中には、昔から固定的に住んでいる人もいますが、流動的に動いている人もいます。つまり、余所から来た人をどう評価するかということです。やはり色々な現場で旧住民と新住民が対立することが見られます。今は昔ほどの対立がありません

し、外から入る人も、旧住民との対立を避けることを考えるようになりましたので、前よりは変わってきています。ただ余所者が外からの論理でグシャグシャにしてしまうのも困るし、発言権が大きいのも困る。余所者ではなく、長く住んでいる人が決めるべきと言いますが、それで全てだとも思いません。外から来た人が不自由を感じてしまうのもどうかと思いますし、社会も歴史を作ってきたといっても、それは固定的な歴史ではなく、絶えず人の流動性がある中でダイナミックにつくられてきたものです。そうすると「誰が主体になるのか」が非常に難しい。これからずっと住み続けたい人に発言権があるべきだと思いますが、それが近代の平等性とどのように折り合いを付けていくかは、非常に難しい問題です。井上誠さんが「関わりの強い人をそれなりに重視すべきだ」と言っていますが、それにしても線の引きどころは簡単ではありません。

それから「どういう里川がいいのか」についても、余所者のこともそうですし、世代によってもずいぶん違います。例えば私が前いた大学の近くに千間山がありますが、そこは昔は里山だったのですが、ずっと放置されて荒れて鬱蒼とした森になっていたのを、都が管理して里山公園に戻しています。年をとった人は、最初の頃に戻ったと喜んでいるのですが、若い人にとっては鬱蒼とした千間山が“本来の姿”だと感じるのです。その時に歴史と言われても、どこで切るのか。合意形成として強引にまとめるわけにもいかない。ただ、最終的には何らかの形で合意をしなければならないし、余所者であろうと科学者であろうと、異論を掬い取るような社会的な装置を確保しておくべきだと思います。その中で、場合によっては色んな歴史の掘り起こしや科学的な知見との中で、揺れ動きながらダイナミックに考えられるような合意空間をつくっていくしかないと思います。

【鳥越】

私と小野さんが「住民が意思決定をする」と言いましたが、それほど簡単ではありません。このときに大きな問題となるのが、「誰がその計画に対して意志決定権を持っているか」と言うことです。その時に、私は「住民が意志決定権と同時に責任も払うべきである」という立場ですが、現実には行政の担当者が決めています。これは、一番望ましくない。その行政の担当者は多くの場合、災害が起こるとマスコミは担当者を叩きますので、伝統的に治水の方にポイントを置きます。ですから面白みのない川をつくってしまうのですが、それは立場上やむを得ません。私も行政職員だったらそうします。そういう状況下にあるので、「住民に意志決定権を与えるべきだ」という、行政の企画部門からの発言権を強めていくことが重要になってきます。住民が話し合っ、実際は間にコンサルや科学者のが入ったりして、それを行政が掬い取って、行政がまとめています。ただそこに住民のアイデアが入っていることと、住民は発言をした限り考えなくてはならないので、責任を持たざるを得なくなっています。だから地方自治体のある段階でかみ始めるんですよ。そんな形で「住民が責任を持つべきだ」と言っています。

【陣内】

私もそこが非常に重要な問題だと思っていて、住民が決めると言うことは具体的な内容とプロセス・メカニズムを含むかということを議論していただきたいと思います。

【島谷】

やはり地域でいろいろ川を守り育てていくことが里川だということに異論がないのですが、そのための仕掛けが今の段階では必要だと思います。日頃さまざまな人が集まって物事を決定する場面に至る前の段階の仕掛けをたくさん用意しておかないと、上手くいかないと思っています。だから普段の色々な活動の中に行政の人とか色々な人が入っていて、その中で色々な情報交換があるといったベースをきっちりと作っていくことで、みんなが集まってお互いを知るというような普段の活動を積み重ねることによって里川が出来ていくと思っています。その中で、行政官も地域の中のひとりになって一緒に考えるスタイルに巻き込んでいかないと、上手くいかないでしょう。福岡で様々な活動を展開しているのですが、何か物を決めるときに、いきなり集まって何か言っても、非常にナンセンスですよ。

【陣内】

あちこちでワークショップが行われたり、行政の方も市民も一緒になってドブさらいをやる活動なんという共同体験をして、それが共同性につながっていき、成功しているようなことを伺うのですが。

【島谷】

何か自治会で問題であった時だけ集まって、何かやってもダメなのです。普段の近所づきあいがあって、そこをベースにして、川に関心がある人が時々集まって、打ち水でも何でもいいんですが、全く関係のないようなところで顔をあわせて、「あの人は、こう考えている」「僕はこうしたい」という考えが出る中で、合意形成されていく仕掛けをすることが重要です。里川は、そういうところに初めてできるのではないのでしょうか。だから色々な先生にきてもらって話をしてもらって勉強をするなどの積み重ねがある。そういう形で川が出来上がっていく、プロセスの方が重要だと思います。

【鳥越】

仰るとおりだと思います。それで今、仕掛けづくりが具体的に動き始めています。しかし今のところ、住民だけでは仕掛けがつかられない、続きにくいという状況があります。その意味で地方自治体の役割が凄く大きくて、地方自治体の中でコミュニティ課の課長であれ、凄く熱心な人がいるところはうまく行っているのですが、熱心でないところは上手くいかない。また災害があったところは上手くいっている。阪神淡路大震災で被害を受けた地域は上手くいっていますが、災害から逃れたラッキーな地域は上手くいっていないのです。一般的に言えば、地方自治体の役割に期待する。住民の力だけでは、私たちの国では、上手く行っていないという印象があります。

【小野】

先ほど泥さらいの話をしたのですが、その池は40年間で80cmぐらいの泥が溜まっています。それを艶っぽい空間に戻すためには、住民の力では絶対無理です。そこで行政の力がいずれにせよ必要になり、一回、全部を除いてもらいます。その後の仕組みを考えていまして、私がまったく別の仕事としてある高校の環境教育のプログラムづくりのお手伝いをしておりまして、そこの実習に入れようと思っています。そこで環境学習をしながら、海水浴をして、盆踊りに行く前にドブさらいをする。つい

でに草刈もする。そういうことをやると恒久的に続くのではないかと思っています。若い男と女ですから、また艶っぽい話が始まるかもしれない。このようにどこかで行政の力が必要になります。

【島谷】

是非、みんなで里川を創っていきましょう。そのためには色々な仕掛けが必要で、その間に入っていくのに大学の先生は重要だと思います。行政とか市民とか言わないで、自分もしっかり入ってやりましょう。

【小野】

今日は記憶ということにこだわりましたが、記憶を発掘して、「こういうことがありましたよ」と発表するのは我々、大学人の仕事です。どういう記憶がいいのかを選択していくのは、皆さんの責任といったら重たいけれども、それも役割だと思います。どういう記憶をつかんでいったらいいのかを考えていただければ、こちらも突っ込んでいけると思います。

【鬼頭】

記憶の発掘とか地域のことを知ることは、ずっと住んでいる人にとっても、余所から来た人にとっても、里川を復活させるためのキーになると思っています。その時に「誰が主体になってやるのか」ということに関して、最近、地域住民自体が調査をするということをやっております。今までは研究者が行っていた調査を、研究者はお手伝い役にまわって、市民が主体になってやるのが、自然科学の世界では始まっています。私の大学の農学部で、市民が調査をするのを大学院の学生が実習として手伝う授業を行っていました。また日本自然保護協会が「触れ合い調査」を展開していて、それは自然だけではなく、地域の古老の人たちに聞き取りをするといった、民俗調査のようなことを市民がやって、冊子などを作成しています。そういうことを色々なところに広めていくために、事例集やマニュアルを作って全国で展開したいと思っています。「研究者が来て調査をしたけれども、地域には何も残らなかった」と言われるので、むしろ市民が自分たちで調査することを、研究者がサポートをする。それが基礎になって里川や里山などが出来ないかと思っています。

【鳥越】

「全ての日本の川は、里川になれるのか」というご質問がありましたが、私は全ての川は里川になれないと思います。これは何で決定するかというと、その川に関心を持っている人が、最初に数人でもいるかどうかにかかっていると思います。そうした人がいない場所では、経験的に無理です。2～3人が中心になって、それが5～6人に増えて、周辺から批判を受けてでも頑張る人がいれば、組織が大きくなって、行政も動くようになるのです。こういう方は非常に貴重なのですが、どこにでもいるわけではありません。ただここで細かくは説明致しませんが、ボランティアの持つ意味が阪神淡路大震災以後、非常に大きな力として、働き出しています。

【陣内】

どうもありがとうございました。本当に様々なご指摘がありましたし、対立点もたくさんあるということが分かってきました。

里川というメッセージ性を持ったことばを広めながら、実際の川・水辺を取り戻し、責任を持って管理し、魅力あるところへ使いこなしていくという方向へ進むための力として、行政の人も、地域の人も一緒にやっていければという趣旨の活動だと思っています。ですから、何らかの結論を出すようなシンポジウムではないと思うのですが、ひとつ明確に浮かび上がってきたことは、崩れかかってしまった共同性を現代の価値やライフスタイル・人間環境の中でつくりあげていくかが、大きなテーマではなかったかと思えます。

私も個人的にさまざまな活動に参加しているのですが、その中で地域交流センターと一緒にEポートという活動を展開しています。ミツカンさんにも一艘お買い上げいただいたのですが、先日も台場公園で大会を開催したのですが、大学生が非常に熱心に興味を持って参加してくれています。今年は10大学ぐらいの対抗レガッタが実施できて、来年は更に拡大したいと考えています。さらに「川の駅」をつくろうと、利根川水域を上がっていくことも考えています。

このような活動が全国さまざまところで展開されていますので、“新しい共同性”というものがあろうるのではないかと思います。国土の多くの部分は細かく所有権が分かれ、利害が対立し、そこをディベロッパーたちが開発していってしまう中、川は“みんなのもの”という考えが根底にある非常に貴重な場所ですので、“新しい共同性”を付与できる拠り所になるのではないのでしょうか。これはまさに都市のランドデザインであり、同時に生活のランドデザインの基盤として川があると思います。永井荷風が「東京にはさまざまな川がある」と書いてあるように、そういった視点で現代に川を取り戻して、日本の広場はヨーロッパのような歴史を持たなかったのですが、川原がその性質を持っていました。ボランティア的に行うか、祝祭として艶っぽくやるかというアプローチの違いはありましたが、元々住んでいた人と、外からやってきた人が一緒になってやれる場として、“里川”という言葉が持っている意味があるのではないかと思います。

本日は長時間、密度の濃いお話をいただきましてありがとうございました。